

2020.09.11.

T.Kobayashi

辿り着いた二つの俳句
(今村甲子夫先生のこと)

1951年(昭和26年)4月1日、静岡県吉原市立伝法(でんぼう)小学校に入学した。

我が家の前の小川をまたぎ、東海道吉原宿から富士宮へ向かうバス道路(通称大宮街道)を富士宮方面に向かって緩やかに上って1Kmほど歩いたところに学校があった。

一年赤組の担任は川島きぬ先生。サザエさんのような髪型で、いつもフォーマルなスーツを着ていて、ぎょろっとした目玉で、きりっとした態度は一年生にとっては威厳を強く感じる先生だった。優しい先生ではあったが、厳しさもある先生で、先生と言うよりもお母さんのようだった。

東京から西へ150Kmほど離れた地方都市ではまだ幼稚園に行く人などいなかったもので、一年生の人間としての成長レベルにはかなりのばらつきがあった。また、まだ「戦後」という言葉が抜け切れていない時代で、各家庭の事情にもかなりのばらつきがあった。

一年赤組の入学記念写真が残っているので、あらためて数えてみた。川島先生と校長先生(今村甲子夫先生)とともに写っている生徒の数は52名だった。履物は靴・下駄・ぞうりと様々だったし、ランドセルではなく兄弟のお下がりの肩掛けカバンの子もいた。鼻水をたらしている子は勿論、学校で「おもらし」をする子だった。農家の子もいたし、サラリーマンの子もいたし、自営業の子も会社経営者の子もいた。

富士山南麓(地元では「岳南地区」と言うのが通例だった)の市町村をまとめる教育委員会では作文教育に力を入れていたこともあり、夏休み・冬休みなどのまとまった休みがあると必ず「日記」という宿題が出され、何かの行事の度に作文を書くことが多かった。二才年上の姉の小学生生活を見ていて、そのようなことは承知していた。一年生の夏休みの宿題として、毎日絵日記を書くことになった。

二学期が始まったある日、校長先生に呼ばれた。「夏休みが終わってからも毎日日記を書き続けなさい」と言われ、時々担任の先生に提出するように指示があった。現在手元に残っている日記帳から想像すると、昭和26年11月が日記帳の始まりだったようで、定期的に提出すると、担任の先生や校長先生の朱書きのコメントが入って帰って来た。先生と生徒との交換日記のような形で学年が変わっても次の担任教師に引き継がれて途切れることはなかった。三年生の途中から絵日記は日記になり、文章のみのスタイルに変わった。

「作文教育」に力が入られていた時代に今村校長先生と出会い、担任教師も一体となったご指導がいただけたということが「日記の継続」につながった。

記憶は定かではないが、四年生の三学期末に校長先生は伝法小学校を去り、教育委員会の方へ移ったように記憶している。また、後年になって得た情報によれば、自宅で幼稚園を開いて園長をしているとのことだった。

1955年(昭和30年)、五年生の一学期末に宮城県伊具郡丸森町の大張小学校へ転校したことで、この体験は終わった。しかし、この貴重な体験のおかげで、今でも途切れ途切れではあるが日記を書くことが続いている。

我が身を振り返る年齢になり、今やインターネット上で様々な情報が入手できるような時代になった。

ある日、今村甲子夫(いまむらきねお)先生のことを少し遡って調べてみたいと思い、行動を開始した。

記憶上のキーワードは、先生のお名前の他には「自宅住所が富士市水戸島」であることと「自宅で幼稚園をやっていた」こと、「伝法小学校の校長先生だった」ことぐらいしかない。

最初に調べたのは、「富士市水戸島に幼稚園があるだろうか？」

「富士ふたば幼稚園」という幼稚園が現存し、園長の名前が今村雄一郎となっており、園の沿革情報から今村甲子夫先生の設立によるものであることもわかった。

そして様々な切り口から調べを進めていった結果、明らかになった先生の略歴は以下の通りだった。

◆今村甲子夫(いまむらきねお)略歴

1910年(明治43年)生まれ

1931年(昭和6年)小学校訓導として教育に携わる

今泉小学校などで教職に就き

伝法小学校・元吉原小学校・富士二小学校・田子の浦小学校の校長を歴任

1953年(昭和28年)伝法小学校校歌制定に貢献(作詞)

教職を退いた後も富士市水戸島でふたば幼稚園園長として幼児教育にも尽力

多年の教職経験と学識を活かして社会教育・文化活動にも活躍

1956年(昭和31年)富士市教育委員会主催の「第2回短歌・俳句募集」で俳句の部の選者

1972年(昭和47年)富士市幼児問題懇話会委員(ふたば幼稚園長)

1979年(昭和54年)富士市市民文化懇談会委員

1984年(昭和59年)富士市長表彰(教育文化功労)を授与

没年不明

考えて見ればあまり不思議なことでもないのだが、両親と同世代の方だったということは最初の驚きだった。1984年に富士市から表彰を受けた時に「富士市公報」に掲載されている情報の中に74才と書いてあったので、1910年生まれであることがわかったが、没年はわからなかった。

富士市今泉に住む方が、昔を掘り起こして「富士市今泉の昔話」というブログを公開しており、その中に「今泉小学校の思い出」という記事があった。小学校二年生の時の担任だった「今村甲子夫先生から学んだこと」としてこんなことが書いてあった。(以下にそのまま引用記載)

今村先生は綴り方(作文)の授業に多くの言葉を下さったので、その一部を思い出として見たい。

心がねじけると 文もねじける 心がうれしければ 文もうれしく

心にしんぱいごとがあると 文もしんぱいな文になる

心が泣けば 文が泣き 心が笑へば 文も笑ふ

心がこまかければ 文もこまかくなる

心がすなをで正しく美しければ 文もすなをに正しく美しい

よくみる よくかく よくあじわふ

かくまで 文をたくさんよむ できごと 人 ものごとを よくみる

よくきく よくしらべる 文話をきく 書きつけておく

書くとき

ふりかえって よく考える だいを見つけて あつめる

文字をきれいに 中心をきめる どんなじゅんじょに書くか きめる

うそを書かないで 正直に書く くわしく書く 心を書く

大ざっぱに書く 知っているだけ かん字をつかふ

口語文か 文語文かきめる 文段をつける

、。「」をつける

書いてから 読みかえす

すらすらよめて お話がよくわかるか

なをす つけたす かんじに書きかへる かなをなをす

、。「」をつける

思ったとおりに かけたか 心と文と ちがっていないか

面白くかけたか

たりないところ よぶんなところないか

インターネットのオークションサイトに「今村甲子夫句抄」なる文献が載っていた。富士市の市民向け俳句募集の選者をしていたという情報もあり、俳句をやっていたらしいことがわかった。

俳句という切り口でさらに探索を続けて行った結果、二句だけ探し当てることができた。

独樂しばし止めて夕焼富士を見よ

初富士を拝む白足袋はきにけり

国会図書館のアーカイブまで遡ればもっと見つけれられるようにも思ったが、時間的にここまでとした。

岳南の風景ならではの二句が見つかり、さらに今村先生らしい空気が感じられる二句なので満足な結果となった。地元で「富士俳句」という句会・句誌に関係していた父とも接点があったのかもしれないと思うと胸の高鳴りを感じた。

伝法小学校に入学した日から数えて70年、辿り着いた俳句をその日の日記に記した。

2020年8月20日、長い時の流れを感じるのとともに、「一人一人の歴史」の中にある「一人一人の人」の持つ意味を再認識した日記の一頁になった。

以上